

## ◆ 今週のコメント

第18週は大型連休中で医療機関が休診することから、例年、この時期は全体的に報告数が減少する傾向にあります。

- ・ 侵襲性インフルエンザ菌感染症の報告が1例(男性, 60歳代)あります。本年の累積報告数は3例となっています。
- ・ 侵襲性肺炎球菌感染症の報告が1例(女性, 10歳未満)あります。平成25年4月1日に五類感染症に追加されて以降、昨年の累積報告数は15例でしたが、本年の累積報告数は第18週時点ですでに16例となっています。

## ◆ 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.27(11例)で、前週(0.44)から減少しました。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数把握の感染症

- ・ 五類: 侵襲性インフルエンザ菌感染症 2例(第17週追加分 1例含む)【1月以降の累積報告数 3例】
- ・ 五類: 侵襲性肺炎球菌感染症 2例(第17週追加分 1例含む)【1月以降の累積報告数 16例】

### 定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

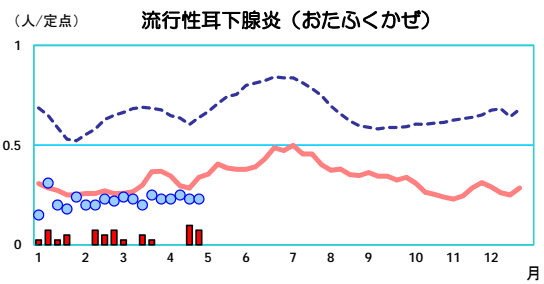
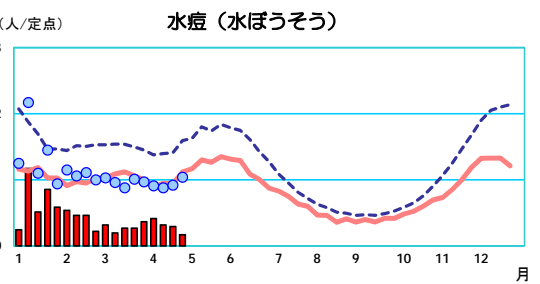
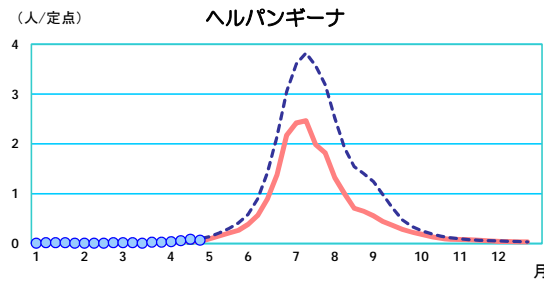
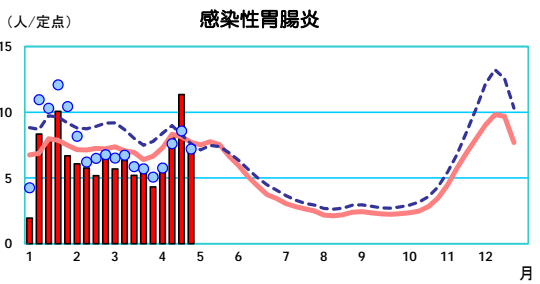
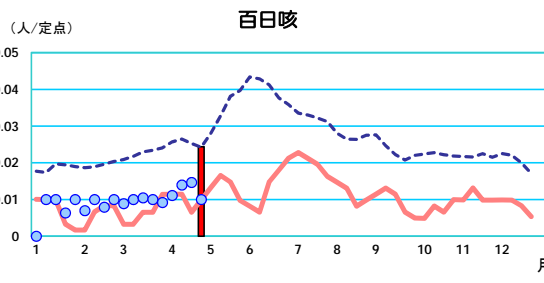
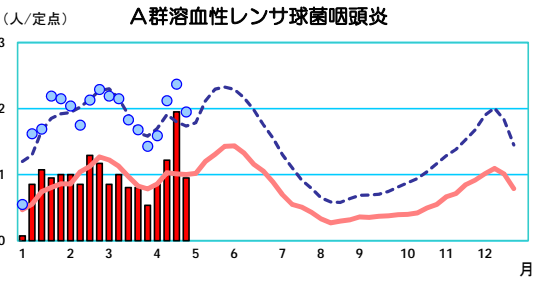
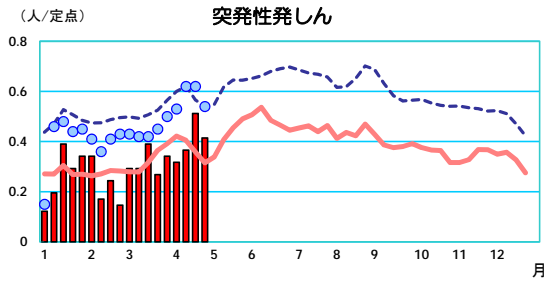
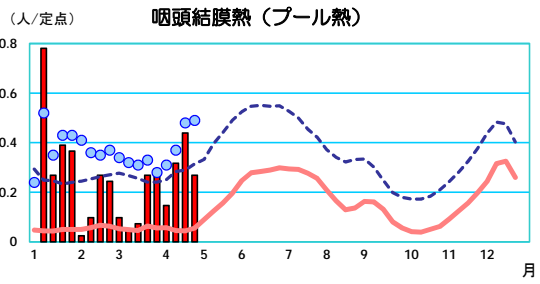
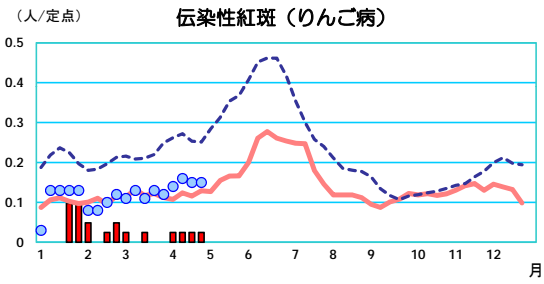
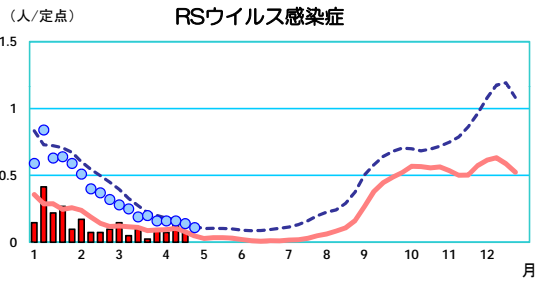
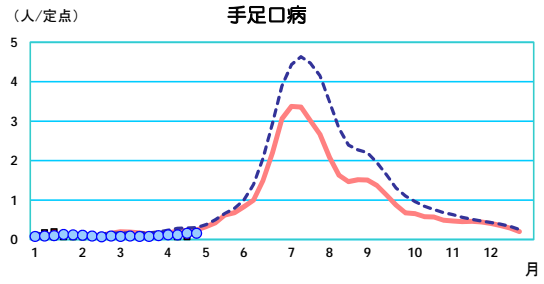
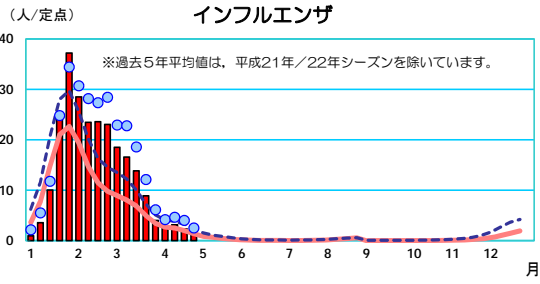
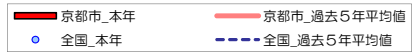
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	1.35	92
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	7.12	292
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.95	39
	③ 突発性発しん	0.41	17
	④ 咽頭結膜熱	0.27	11
	⑤ 水痘	0.17	7
眼科	流行性角結膜炎	0.00	0

## 【次ページ以降の主な内容】

疾病別推移グラフ / 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

(注) 京都市のデータは、平成26年5月9日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

# ヘルパンギーナ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



# 第18週(4月28日～5月4日)トピックス: <咽頭結膜熱>

平成26年

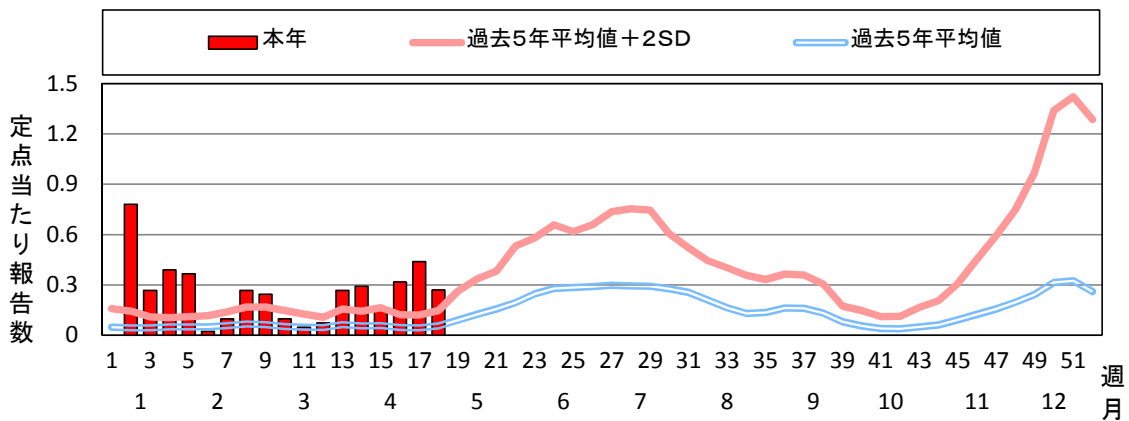
咽頭結膜熱の定点当たり報告数は、0.27(11例)となり前週(0.44)から減少しました。しかし、過去5年間で比較してみると、報告数は3週連続で「過去5年平均値+2SD(\*)」を上回っており、かなり多い状態が依然続いています。

咽頭結膜熱は、例年、6月頃から徐々に増加しはじめ、7～8月に流行のピークを迎えます。昨年は、6月に流行のピークを迎えた後いったん落ち着きましたが、11月以降増加に転じ、12月に冬季としては最大の報告数となりました。本年に入ってから、年末年始を含む平成26年第1週を除き、過去5年平均値を上回る状態が続いており、さらに増加傾向にありますので、動向にご注意ください。

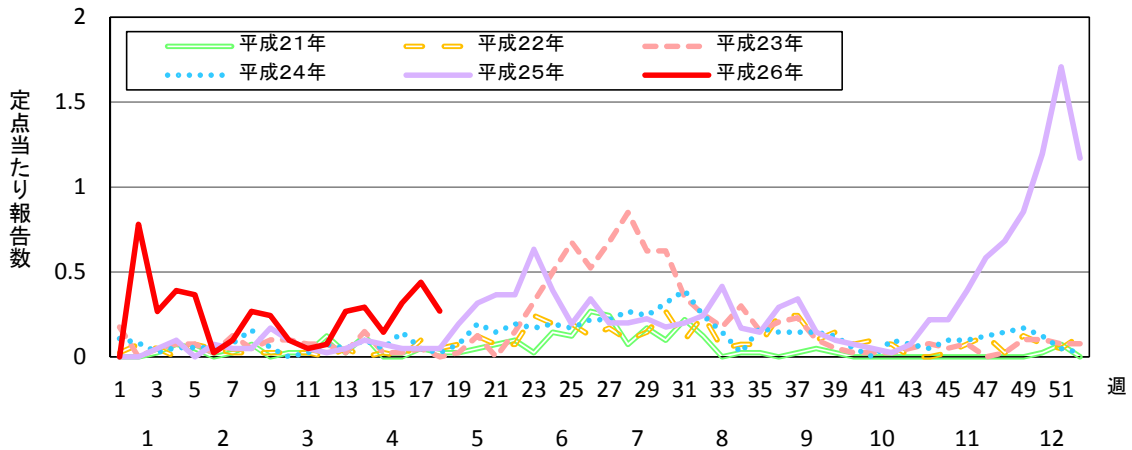
年齢階級別では、近年、3歳までの割合が報告の過半数を超えており、特に1歳児が最多を占めています。しかし、本年は、3歳までの占める割合が約45%にとどまる一方で、4歳児の報告が最も多くなっています。今後の流行期を控え、小児の集団生活施設である保育所、幼稚園および小学校等で集団発生の可能性もありますので、十分に注意してください。

(\*)SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大きさを示す尺度です。下のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がピンクのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間で比較してかなり多いことを意味しています。

本市の定点あたり報告数の推移



本市の過去5年間との週別比較



本市の年齢階級別割合の推移

